

## 館種を超えた図書館の連携 －海外の事例と和歌山での実践－

2021. 12. 9

於 和歌山大学図書館  
渡部幹雄

私は和歌山県外の公共図書館の世界から大学図書館である和歌山大学図書館に移りました。和歌山大学図書館に在籍したのはほぼ10年でしたが、フィールドの違う世界からの移籍でしたので、色々思うことがありました。中でも一番足りていないと感じていたのが図書館の連携でしたので、そうした点を中心にお話させていただこうと思っています。

### 1. はじめに

問題の所在と本日のテーマ

- ①何故、図書館は普及しないのか？
- ②何故、図書館の地位は向上しないのか？
- ③何故、頼りにされないのか？
- ④課題を乗り越えて明日の図書館を目指す連携
- ⑤館種を超えた連携により潜在する図書館力の創出  
塊より始めよ！ 課題解決の第一歩としての連携

まず始めに資料をご覧ください。①なぜ図書館が普及しないのか。いや既に十分に普及しているのではとも思いかもかもしれませんが、図書館未設置の自治体がまだまだ存在しているのが現実の実態です。日本中の図書館の町や村を見渡しますと、図書館のない村も結構ありまして、30%ぐらいは図書館未設置の自治体です。また欧米に比べると末端の図書館分館が少ない。私は中学校区に一館の図書館を普及させようという立場にいますが、そうした観点で見ますと、中学校は約一万校あるのですが、その約3割の約三千館台の図書館しかありません。だから約7割の中学校区に図書館がないという状況になります。身近に図書館の姿が見えないということになります。図書館法が制定されているのに何故日本の隅々まで図書館が普及しないのかなというのが私の素朴な疑問です。それに加えて図書館の②地位がなぜ向上しないのかという疑問も持っています。一生懸命やって来られた実践が年々積み上がってくればいいのですが、残念ながら、図書館の職場から転職される方が増加傾向にあって、ずっと図書館で継続して働くことが非常に難しい。学校の先生は就職すれば最後まで学校の先生であり続けるのですが、図書館界においてはそういうことがない。今は非正規雇用の方がどんどん増えており、僅かな年限で職員の入替わりが有り、非常に残念ですね。そういう現状では図書館の地位はあまり高くはならない。それと、図書館が③なぜ頼りにされていないのかも課題です。その原因としては図書館の仕事が可視化できていない、

外部に見えないということが考えられます。図書館に行ったところでそのサービスが見えない、またサービスが見えたとしても利用者が抱えている問題の解決に役立たないとなれば、図書館は頼りにされません。そういう課題があるという前提を始めに確認させていただきます。

本日は様々な④課題を乗り越えて、明日の図書館を目指す連携という視点でお話しさせて戴こうと思います。従来の連携の発想を超えた連携のあり方、具体的には⑤館種を越えた連携で潜在的な図書館の力を引き出すことができるということを私の経験を通してお話ししたいと思います。今の図書館界の現状を継続することは良くないというのが私のメッセージであり、本日の主な内容です。課題解決のための最初のステップが連携であるという認識でお話しさせて戴きます。

## 2.図書館についての現状認識

- ①図書館像が共有化されていない
- ②公共図書館の経営主体の複雑化の影響
- ③成長しない図書館の現実
- ④醸成されない図書館の専門性
- ⑤孤立化する図書館

今共有化された図書館像があるでしょうか。10人いれば10個の異なった図書館像があるように思えます。図書館像が共有化されないのは公共図書館の経営スタイルの複雑化が影響しているのではないかと私は考えています。図書館というのは、実は非常に大きな力を持っているのに、矮小化された図書館像が流布すると、それがテレビコマーシャルではありませんが、全体像の中の一点だけが強調されたイメージが伝わって本来の図書館像が隠れてしまう現実があります。

次の成長しない図書館の現実についてですが、インドの図書館学で有名なランガナタンの言葉に、「図書館は成長する有機体」だという名言があります。始めは幼い図書館でもだんだん裾野が大きくなって、やがて地域に貢献する図書館に成長するということです。ところが、現実には住民にさほど期待されていない、働く職員の身分も安定していない状況が、時の経過を経ても変わることなく固定化してしまっている図書館が少なからずあるのではないのでしょうか。

次の、醸成されない図書館の専門性。これは職員が長期にわたって雇用されて、仕事が継続することがないと、図書館の専門職員としての力が蓄積されないということです。私は幸い専門職として採用されて、退職時の和歌山大学勤務迄ずっと専門職として仕事をさせていただきました。これは周囲を見渡してもレアなケースです。今、図書館員が図書館員としてずっと生涯に亘って働くことができるのは、国立国会図書館と大学図書館ぐらいかもしれません。他の図書館で働いておられる多くの方々が、いつ職場が変わるか分からないという思いを抱いておられます。専門性が担保されていない、専門家としての力量の蓄積が難しいという状況にあります。一方、学校教育では明治の初めの頃に師範学校が整備されて教員養成が確保され、学校には教員という専門職がいることが当然のこととして定着しています。図書館においてもそのような養成制度と専門職の配置は本来当然のことなのですが、現実にはそういう理想には程遠い状況にあります。

### 3. 日本の課題を明確にした海外の連携の姿

これまでに体感した連携例

- ①フィンランドの公共図書館 国境を越えた連携
- ②アメリカの大学・学校図書館・公共図書館
  - (1)公共→大学
  - (2)大学→公共
  - (3)学校図書館→大学図書館→公共図書館
- ③スウェーデンの公共図書館→大学図書館→学校図書館



では海外の事例を少し見てみましょう。この写真の図書館はどこかと言えば、図書館に興味ある方はひょっとしたらご存知かと思いますが、ストックホルムの中央図書館です。有名な海外の図書館の中でもとりわけ有名です。世界中から視察に来られるような図書館です。この大きな写真はどこにあるのかと言えば、ストックホルムの国際空港に国を代表する他の景色とともに飾られています。ということは何を意味するかと言いますと、この図書館はスウェーデンの誇りであり、スウェーデンのシンボルになっているのです。図書館の大きな写真が国際空港で無言で国の姿勢を示しているのです。日本の成田空港や関西空港にこんなに大きな図書館の写真が飾られることがあるのでしょうか？こういう展開に日本ではどうしてならないのかなというのが、私の偽らざる気持ちです。



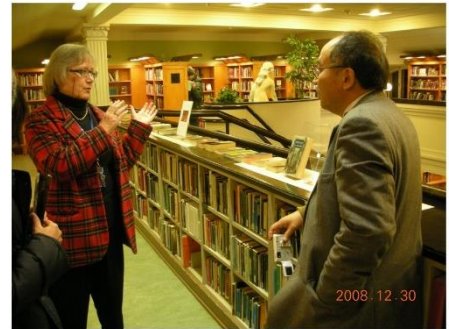
図書館の内部は実際にこのような形状になっています。円筒計の構造の内側にこのような形の書架があって非常にデザインが洗練されております。日本で建築家サイドの方がおそらくこのデザインを真似たのではなかろうかという事例が散見されます。なかにはストックホルム中央図書館の建物構造だけを真似て、中身の本はいかにも沢山あるかのように見せている図書館もあります。図書館は見世物小屋ではありません。内実が伴った図書館を希求する私たちの立場からすると、辟易します。ストックホルム中央図書館は見えない部分にも工夫が凝らされています。資料と資料を繋ぐように通路が四方八方にあります。ちなみに、ストックホルムの人口は八十数万ですが、ストックホルム市には約40の分館があります。なかには力のある、日本でいえば小規模の市立図書館の本館並みの分館もあります。本を大切に、文化を大切にする北欧の精神文化の優れた豊かさをこれらの図書館を通して感じ取ることができます。国の誇りとして国際空港に中央図書館の写真が掲示されていることが、内実を伴った真正のものであることがよく分かります。

海外の図書館は国によって多少事情が異なりますが、ほとんどが国際標準に沿って活動を展開しています。ところが日本の図書館はどちらかというと貸出を中心として、スーパーマーケットのレジ打ちみたいな感覚でサービスを提供しているような印象を受けます。機械的に流れてくる情報を画面上で見て、右から左に物を渡すような感覚でのサービスのように見えます。そうではない姿を海外では見かけます。それは特に北欧だとか、図書館先進国と呼ばれる国々で実践されています。市民が支えていたり、図書館同士が支えていたり、博物館が図書館を支えたり、大学図書館が他の図書館を支えたり、色々な相互に支える文化があります。先ほど挨拶をしていただきました遠藤先生はオランダのライデン大学に留学されています。それを和歌山大学に赴任当初に聞きましたので、遠藤先生に「ライデン大学のお知り合いをちょっと教えてください」とお願いしたら、ライデン大学の附属植物園の園長さんとお友達だということでした。そこで遠藤先生にご加勢戴いて、植物園の園長さんからライデン大学の図書館に、「日本から WATANABE というのが来るからよろしく」と連絡をしていただきました。そういうことがありまして私はライデン大学の資料に辿り着くことができました。館種の異なる施設の植物園と図書館ですが、そうした連携は日常的にごく自然に行われているようでした。

館 & 館連携



公 & 公



次の写真はフィンランドの図書館です。私は和歌山大学に来る前に、滋賀県の愛知川図書館に勤務していました。その時に日本的な図書館観だけでは視野が狭くなると思いまして、図書館の有志で海外図書館見学ツアーを企画致しました。そして世界的に先進図書館としても知られたフィンランドの各図書館を訪問することに致しました。折しも当時のフィンランドは学力世界一と言われていました。それで教育と図書館がどのように連携しているのかフィンランドの市井の図書館の生の実態を見ることに力点を置きました。フィンランドで道を行く女性に、「図書館はどこにありますか」と尋ねましたら、「あそこです。あなた達はどこから来たのですか」と聞かれたので、「日本から図書館を見に来ました」と答えました。すると、「じゃあ私が図書館長に引き合わせてあげましょう」と言って、この図書館に連れてこられた時の図書館長さんとの対面写真がこれです。で、私はこの館長に、「あなたの国は学力世界一といわれていますが、図書館はそのことに貢献していますか？」と聞きました。すると館長は開口一番、「オフコース」と答えました。で、そういうサービス体制が築かれているという生の実態に訪問者一同が驚いていますと、私の館だけでは調査サンプルには足りないだろうからと言ってすぐ他館に電話をして、次の日の訪問先として別の図書館を紹介してくれたのでした。次の写真はまた前日と同じことを聞いているシーンです。厄介な東洋人の突然のアポ無し訪問はぞんざいに扱ってもいいのでしょうけれど、それぞれの館長さんから、丁重な扱いを受けました。お互いに図書館を高めあいましょう、連携しましょうというのが図書館のポリシーとして有ることを感じました。これも最初は普通の市民から図書館に繋がった

展開でした。このような市民と図書館の連携のようなことがごく日常的に行われているものであることが容易に想像される出来事でありました。資料の貸し借りだけでなく、生身の人間を繋いでいこうというのが図書館本来の姿の中にあるのですが、それをこの訪問を通して改めて実感したのでした。

### アメリカでの連携の姿

公共→大学図書館

大学図書館→公共図書館

学校図書館→大学図書館→公共図書館

住民



住民



住民



次はアメリカの五大湖の近くのウィスコンシン州ウェストベンドという人口約2万8000の町です。そこに私は当時図書館を離れていまして教育長として姉妹都市訪問を致しました。私は一般家庭のホームステイ先の方からまず公共図書館に連れ行かれました。次いで学校図書館に連れて行かれました。そこで色々な図書館の話をしていましたら、ウェスコンシン大学の大学図書館も案内していただけることになりました。大学図書館では突然の訪問でしたが、丁寧に対応していただきました。こういう感覚で市民同士、あるいは図書館同士で助け合いながら図書館網を広げていくということの大切さを感じました。この写真も同じアメリカです。アメリカの西海岸に有名なシアトル中央図書館があります。これは世界的な権威が設計した11階建ての巨大な図書館です。ここへの訪問は予定に入っていませんでした。スケジュール的に無理だということで、メールでアポも取っていませんでした。それでも何故行けたかと言いますと、一口で言えば連携のお陰でした。同じシアトル市にあるワシントン大学に視察に行きましたら、ワシントン大学の司書の方が、「ここまで来たからにはシアトルの中央図書館を見たいだろう」と言ってくれたのです。私達図書館員の興味関心を押し量ってのことでした。私が頷くと直ぐに館員が電話で、「今から日本のWATANABEという者が行くからよろしく」と突然の訪問の橋渡ししてくれたのです。そのお陰でシアトルの巨大な図書館の中をワシントン大学からの連絡を受けた図書館員によって案内して戴くことができました。これこそが大学図書館と公共図書館の連携の姿です。正しく阿吽の関係性が構築できているのでした。公立図書館だろうと大学図書館だろうと、図書館という名前のもとに固く結ばれた応援組織のように見えました。

それから数年後に全米で住みたい街ランキングの上位を30年間走り続けている町であるオレゴン州の

ポートランドを訪問する機会が訪れました。この町の図書館網というものがどのように機能しているのか、更には図書館とまちづくりとの関係性を確認することが目的でした。旅行計画の立案作業中に偶然にもポートランドの学校図書館で働いたことのある日本在住の元司書との出会いがありました。訪問計画を元司書に伝えますと、元司書は元職場に連絡して私の訪問計画を元同僚に伝えました。その同僚の方からポートランド市内の各館の図書館司書を紹介して戴き、そのお陰で訪問を円滑に行うことができました。そしてこれが連携の連鎖の始まりでした。この写真の人は日本の元同僚から紹介して戴いた学校図書館の司書さんですが、私の要求に応じて市内の各図書館に繋いで戴きました。校内における図書館の連携は見事なものでした。教育学者としてのジョン・デューイが構想した学校図書館と学校内の連携の図がありますが、その通りの図書館でした。こっちが図書館でこっちが理科室っていう感じで、常時連携ができるようになっていましたし、校内の各組織とも図書館は連携していました。

また、この人の知人を通して館種の異なるポートランド州立大学図書館に繋いで戴くことができました。この知人には更に、ポートランド州立大学の副学長と公共図書館の分館の館長さんたちの話を私が伺う場を設けていただいた上に、私が図書館家具としての木製品の製作方面に関心を抱いていることを知ると、そのような視察先をも練っていただきました。こうして次から次へと労せずして視察先を回ることができました。一週間ほどの間に二十数館の図書館の視察調査ができました。

このオレゴン州ポートランドは全米の住みたい町ランキングの上位にあり、現在人口が1980年当時の2倍になっていまして、活気溢れる町だという印象を持ちました。図書館の姿を可視化できるような仕組みが随所に見られます。中央館と20館以上の分館の図書館網が整備されています。そうした図書館の充実度が町の文化を支えているように見えました。この町での私の視察調査に対して、ポートランド州立大学の女性の司書の方からも全面的なご支援を戴きました。余談ですが、ポートランド州立大学ホテルに格安のゲスト料金で宿泊できる手配も戴きました。日本で私が視察調査を構想・準備をしている間に、先方の連携の輪がドンドン広がっていたのです。日本の図書館の場合は連携の限界を最初に一方的に、機械的に決めて、自分の役割はここまでとゴールを早く決める傾向があるように思います。

次にスウェーデンの連携の話ですが、和歌山大学のこの会場にスウェーデンの方が実際に来られて、スウェーデンの公共図書館に関する講演をして戴いたことがあります。その発端は新評論から出されている『スウェーデンの図書館』という本です。そこに田舎の林業の町の図書館が紹介されていて、私は図書館と林業との関係性と学校図書館と公共図書館の合体型という2点にとりわけ関心がありました。林業の県である和歌山との共通事項も知ることと連携の一形態でもある公共図書館と学校図書館の合体の実態を知ることが目的でした。その田舎町の図書館を訪問しましたら、その図書館の司書から「林業との関係性を更に詳しく知りたいならば、すぐ向こうに農業大学の図書館がありますよ。今から連絡するから」と、農業大学の図書館を紹介して戴きました。そこでその農業大学図書館を訪問しますと、今度は農業大学の司書から「あなたは木材加工に興味がありますね。とっておきの人を紹介します」と紹介していただいたのがこの人です。この写真の女性の方、中野あいこさんという方です。スウェーデンのウプサラ大学という名門大学の林業研究専門の図書館の司書をしておられました。農業大学の司書はその中野さんを電話口に呼び出し私と中野さんを繋いだのでした。その後中野さんのご主人が大阪市立大学で講演をなさるといご連絡がありまして、その機会を活かして和歌山大学で中野さんの講演会が実現することになりました。講演会ではスウェーデンには公共図書館と学校図書館の一体型図書館が約400館あるという事情等々をお話しいただきました。その3年後に私が現地に行きまして、中野さんのご案内で

学校図書館と公共図書館が合体した図書館の実態調査が実現しました。今日神山町の人が来られていますが、神山町のような小さな山間地で、小さな小学校の学校図書館と公共図書館が連携しています。この写真が中野さんにそこに連れていってくださった時のシーンです。こうして学校図書館や公共図書館のお互いのネットワークを駆使した連携の実態に触れることができました。

スウェーデンのストックホルムから飛行機で1時間程のところにゴットランド島という離島があります。そこに大学図書館と公共図書館が一体化した図書館がありまして、1階は赤ちゃんがうろうろしている絵本のコーナーと一般書があり、2階には一般書、3階には研究書がありました。そういう図書館をご案内いただいた方が写真に映っていますが、これも中野さん達の図書館ネットワーク連携によって実現したものです。私の要望することが訪問前にすでに先方に伝わってしまっていて、何時から何時までという厳密なスケジュールに基づいて図書館の各部署の方からご案内を受けました。スウェーデンの連携によるサービスを楽しませて、連携の恩恵を実感した次第です。下支えと言いましょか、みんながお互いを高めあうシステムが出来上がっていると思いました。日本では自分のところだけ上手くやって議員から怒られないならそれでいいとか、問題視されなければそれぐらい迄で良いという段階にとどまっているかもしれません。でも図書館が本来目指す方向に向かって、牛歩の歩みかもしれませんが、実践を積み上げていくことを考えていかなければいけないと思ったところです。

#### 4. 連携基盤確立の為の和歌山大学での実践

##### 和歌山大学図書館の根底にある課題と解決の道筋

- ①和歌山地域図書館協議会の再興の試み
- ②図書館の裾野拡大を視野に教育学部で関連授業を開講
- ③大学図書館と公共図書館、学校図書館を繋ぐ試み
- ④市井の中で図書館と遭遇の試み
- ⑤図書館の後ろ盾となる行政との協働
- ⑥学生から広がる間接的な図書館の普及 図書館利用・教養科目

以前から海外の色々な図書館の事例を見ていましたので、和歌山大学に赴任する前に理想とするイメージを描いていました。では和歌山大学ではどのように実践すれば良いのか。やはり氷山の下の部分、富士山の裾野に相当する部分を広くすれば、結果として図書館の力が増すのではないかという結論に至りました。そこで和歌山大学図書館の根底にある課題を解決するために①から⑥の六つの手法でなんとか図書館力をアップする仕組みを作ろうと考えました。始めに休眠状態とも見えた和歌山地域図書館協議会を再度盛り立てよう、いろんな資源を共有化しようという試みをやらせていただきました。次に人材養成によって裾野を広げることが重要なので、教育学部で関連授業を開講させていただきました。イギリスへの訪問調査中に教育学部の先生から次年度の図書館関係課目開講の依頼を受けました。渡りに船でした。当時の学校図書館を巡る状況は後でお話しますが、和歌山の学校図書館に司書が一人もいないという深刻な状況でした。和歌山大学は和歌山県下に多数の教員を輩出していますので、図書館に理解のある教員の養成は実に重要なことです。それは教員組織から学校図書館を盛り立てて行くために欠かせない道筋でした。それで私は「学校図書館経営論」と「学校図書館計画論」という全国でこの大学にしかないような科目を選択必修の科目として100人くらいの学生にレクチャーする機会をいただきました。他に学校図書館と公共図書館を繋ぐ試みもさせていただきました。これは近場の、例えば和歌山市民

図書館や県立図書館、あるいは和歌山北高の図書館や西高の図書館というように先ず足元からの取り組みでもありました。近くの中学校の図書館にお邪魔したりして関係性をうまく足元から作ろうという試みもさせていただきました。うまくいったかどうかは別として、市井の中で図書館を可視化できる仕組みを創ろうとしたわけです。また、図書館にまるっきり関係のない人が図書館の話をするように仕向けることも考えました。そういう私の罠に引っかかった方のおひとりが今日お見えの丸紀木材という和歌山の木材加工の社長さんです。私の前任の池際館長が木材を研究する研究者で、池際先生にくっついて来られた社長さんをちょっと取り込んで、和歌山に有り余る杉ヒノキで図書館家具を作ろうとけしかけました。その私の戦略に乗ってきてくださって有難く思っています。今まで図書館を語る立場にない人が図書館を語るという仕組みを試みさせていただいたのです。あとは、図書館の後ろ盾の行政との共存。これは県教委に行って「県の重要課題は他県に劣る教育課題の筈です。学校図書館で司書が0%は恥ずべきことですよ」と、挑発的に県教委に乗り込んでいきました。県教委には私の乱暴なお願いを受け止めていただき、私は県教委の学校図書館推進の委員になって、その後九度山など県下各地で読書推進シンポジウムの企画をさせていただくことになりました。第1号読書推進のシンポ会場が九度山になりました。九度山では町長が壇上でシンポ開催の来賓挨拶で、「図書館、いや童話館を作らせていただきます」とみんなの前で明言しました。それで童話館が誕生することになりました。その後町が童話館の開設に動いて、先ほど遠藤先生の挨拶にありましたように、関係者で盛り立てていくことになりました。

次に、学生から広がる間接的な図書館の普及。これは教育学部で学校図書館について講義するだけでなく、一般教養科目として、「地域図書館論」というものを引き受けさせていただきました。その中で教育、経済、システム工学部、観光学部の全学部の学生たちに図書館に興味を持ってもらうことを考えました。和歌山大学の入学生の三分之一が県下の出身です。卒業後学校の先生なった人には学校で図書館の大切さを語っていただく。また他学部の卒業生にはそれぞれの置かれた場で図書館の理解者を広げていただくことを考えたのです。これには少し理由があります。本日この会場に来られている藤本先生が作られた図書館未設置と設置状況を示す地図をご覧ください。和歌山県の図書館の現状を可視化すると、こういう実態が見えてきます。赤いところが図書館の設置されている自治体です。青いところが図書館のない自治体です。現在は少し変化しているかもしれませんが、3年前にはこういう状況でした。これが和歌山の現実です。いいものは伝播するといわれますが、山や川にさえぎられる等々のバリアがあって図書館が普及していません。こういう状況下でもなんとか図書館の光を広げていこうという試みとして、九度山があり今日お見えの串本や那智勝浦などがあるわけです。そうした拠点から県下全域に図書館網を広げられるのではないかと考えたのです。市井の方々に図書館の姿を見せるために、童話作家に来ていただいたり、子どもから図書館にアプローチすることを考えて自治体とタッグを組ませて戴いたり、手当たり次第に図書館に結びつくことをさせて戴きました。有田市での取り組みも思い出に残っています。有田市では学校図書館のモデル事業をやらせていただき、その結果少し図書館環境が改善されるようになりました。

こうした人からの図書館イメージ作りとは別の方法も構想しました。図書館のイメージを変えるような空間づくりです。個々のリニューアルや改築によって、今までの図書館のイメージを変えることです。これまでの固定観念にとらわれた暗い図書館からの明るい図書館への転換でした。私のリニューアル経験や新築図書館の立ち上げ経験を通して、地域の図書館はこういうものだ と提示しようと思ったのです。そういうことを各地でさせていただきました。



## 5. 円滑な連携のための条件

- (1)大きな図書館像の視点を保持すること。
- (2)各図書館の限界と潜在能力を認識すること。
- (3)館種を越えて協働の姿勢を持つこと。
- (4)成果を共有すること。

図書館に逆風が吹いている現在の厳しい状況下で大きな図書館像は影を潜め、矮小化された小さな図書館像が世の中に流布しています。そうした現実への対応も考えました。退職直前のことですが、若い学生がバイト先を選んでいまして、「図書館があるな、スーパーマーケットもあるな、まあスーパーマーケットのレジ打ちよりはかっこいいから図書館にしましょう」と話しているのを耳にすることがありました。巷の図書館はそういうレベルで捉えられているという現実には遭遇しました。巷では図書館の見えない本来の全体像の中の一つのパーツとしての図書館像しかイメージされていないようです。小さな矮小化された図書館の姿しか見えない状況を脱して、本来の大きな図書館像が市井の中で構築されるようにしなければなりません。大きな図書館像というのは国際的に通用する有名なユネスコの公共図書館宣言だとか、学習権宣言に基づく図書館像です。そこに至る学習活動を深めることが大きな図書館像を普及する近道ではないかと思います。そのプロセスの中で高等教育とリンクしている図書館像が浮かび上がって来る筈です。そのように立場に立てば、各図書館間の連携も円滑に行く筈です。そういう発想が現在の図書館には不足していると思います。

各図書館の潜在能力は形而下では認識されません。わたしはイギリスである光景に衝撃を受けたことがあります。1994年の司書の海外派遣事業で訪問した英国イングランドのレディングという町の図書館でした。レファレンスのコーナーに列ができているのを見たのです、それは図書館の力を認知している住民の信頼の証の光景でした。ここまで信頼されている図書館が日本にあるだろうかと思いました。無料貸本屋や受験の学生のための空間のレベルでは、いつまでたっても私がレディング等々で見たような図書館にはなり得ないとも思いました。図書館本来の目的に照らして考えれば、その高い潜在能力を発揮してもっと社会に貢献できるはずです。

館種を越えた連携の必要性。先ほど申し上げたように、ライデン大学の館種を超えて図書館をサポートしてあげようというような気持ちが広く行き渡れば、北欧のオランダ、デンマーク、ノルウェー等々で見た環境に近づくことができると考えています。それは学校教育だけでなく、生涯に亘る学びを保障し応援する体制の構築に他なりません。そのために図書館が必要不可欠な存在とならなければなりません。それには様々な類似機関と成果を共有する共存共栄の姿勢が必要です。それぞれの成果をそれぞれに還元するような姿勢で、お互いを高めることがそれぞれの機関の真の発展に繋がります。所属組織の限界を知りつつ不足分は他から補ってもらおう姿勢が何れの館種にも必要です。

## 6. おわりに

和歌山図書館協議会の役割

大学の地域貢献の重要性

中村哲氏の手法に学ぶ

裾野の拡大期に於ける果たすべき連携

和歌山地域図書館協議会の役割。この組織は全国的に見ても先進的なものでした。全国に先駆けて組織化された時、図書館の論文情報にも出ました。それほどに画期的なことでした。が、発足後しばらくはほとんど休眠状態で、総会が年に一回催されるだけという状況でしたので、強引ではありますが、図書館協議会の立て直しに取り組みさせていただきました。この協議会は小さな図書館から大学図書館まで網羅していますから、その大きな知識の塊をジグゾーパズルのように組み合わせる作業をしながら、みなさんの知的要望に応えるような体制になることが必要です。今日は県立医大の方はおられないかもしれませんが、以前この協議会に医大の先生が出席されたことがあります。その際に県立医大も協議会のメンバーであることを強調されまして、会員のメンバー意識が一挙に高揚し、感動したことを覚えています。ここに集まる集団は福祉あり、教育あり、経済あり、観光あり、医療ありで、色々な情報を橋渡しできる大きな組織に成り得るわけです。末端の方々までが同じ目線で活動すればかなり大きな力になると思います。

大学の地域貢献の重要性。大学に関して勝手に申し上げますと、和歌山の地域特性を生かしたオンリーワンを目指していけば世界に通用するオンリーワンの大学になることも可能だと思います。和歌山の大自然などいろいろな環境を見ますと、世界の課題がここに凝縮されていると言っていいかもしれません。ですから連携によって力を合わせれば、地域の課題を図書館で解決したりということにもなっていくはずです。」例えば組織に結集する特色を生かすことによって他所との差別化が容易にできます。個別に見ても、ロケットを飛ばす串本の方がいらっしゃるし、欧米人の関心が高い山岳仏教の高野山大学の方もおられます。そういう様々な魅力に気づくことで経験値だとか、そこにある記憶あるいは記録を共有化すればこの集団はもっともっと大きくなると思います。そのための地域貢献は大切だと思います。

中村哲氏の手法に学ぶ。中村さんはお医者さんでしたが、アフガンでは高度な医療より、明日のご飯を食べることからやらないと救えないということに気がつき、土木技術の灌漑技術を学んで、水を供給することを始めました。お医者さんが命の源の食からの取り組みをされ、それで信頼を築いたのです。普通でしたら、アフガンにハイテクの医療機器を持っていくという発想になるかもしれませんね。これを図書館に置き換えますと、高度なことも大事ですが、初歩的な、基本的なところが足りていない場合はそれをまず補うというのが、中村さんの手法です。

裾野拡大における果たすべき役割。裾野の拡大の必要性を認識して日々の仕事をする姿勢があれば対応できると思います。図書館司書の専門性はあらゆる分野に対する好奇心とチャレンジ精神を持つことで養われます。各々の裾野で日々課題解決に向けて取り組んでいると、専門性が自ずと見えてくるはずです。その積み重ねが信頼される専門性や専門職の確立につながると考えています。